



Title	尾崎秀実の日中戦争期評論：両国民提携へ「日本が先ず変われ」
Author(s)	高木, 康行
Citation	アジア太平洋論叢. 2006, 16, p. 159-180
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100033
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

尾崎秀実の日中戦争期評論 —両国民提携へ「日本が先ず変われ」—

高木康行*

はじめに

数ある中国研究家のなかで、尾崎秀実（おざき・ほつみ）を際立たせるのは、日中両国民の提携を唱え、しかも課題として、自分に課した人間だったことである。そして模索の基点は、民衆だった。国家ではない。その意味でも戦前を代表する「新しい中国研究者」だった。軍国日本と、目覚め行く中国。この絶対的対立のなか、どのように提携を図るのか。尾崎が辿り着いた答えは、最終的には「日本がまず変われ」だった。中国民衆の苦悩を引き受け、世界のなかで、日本と日本人の在り方を問いつづけた、その結果だった。

そればかりではない。『中央公論』『改造』など代表的総合誌や大陸問題専門誌で、「日本が先ず変われ」と言うのである。「変われ」とは、体制変革にほかならない。天皇制国家には恐ろしい革命と見られてもやむをえない。戦時言論統制の下である。大胆極まりない。『尾崎秀実著作集』全5巻（勁草書房、1977－79年）に納められている尾崎の「時評」から点検して見よう。

I 時代を読む洞察力

1) 薄介石は生きている

まず、尾崎の人となり¹。尾崎秀実（1901－1944）は2度、国民に名前が知れ

* 元朝日新聞記者

渡った。最初は、1942（昭和17）年5月、国際スパイ、リヒアルト・ゾルゲの共犯者としてである。2度目は、戦後間もない1946（昭和21）年、獄中書簡集『愛情はふる星のごとく』の著者としてである。最初は太平洋戦争緒戦の勝利に沸くなかで、卑劣な売国奴として。最後はベストセラーの筆者で、平和の使徒として。獄中生活3年の後、1944年（昭和19）年11月、敗戦の10ヶ月前、ゾルゲとともに処刑された。43歳だった。

中国研究家としての尾崎は、西安事件の報道で実力を知られた。1936（昭和11）年12月12日、張学良が蒋介石を監禁し、抗日を強要した事件である。いち早く蒋介石の生存を見通した。ジャーナリズムは、蔣は殺害されると判断していた。この時評「張学良のクーデターの意義」（翌年1月号『中央公論』）は、国民党と共産党の合作の潮流の高揚をしっかりと踏まえ、中国民衆の自立への目覚めを捉えていた。（『尾崎秀実著作集』I 138ページ以下、Iと表記するのは『著作集』第1巻のこと、ローマ数字のあとに引用箇所のページ数を入れる）

4年間の朝日新聞上海特派員経験に加え、中国問題への沈潜がこうした予測を可能にしたと思われる。

ウイットフォーゲルの『目覚めつつある支那』に魅せられ、中国社会の分析にマルクス主義歴史観が有効あると考えた。そして、支那問題の現実の展開が、マルクス主義理論への関心を深めた。

中国研究者、いや歴史家として彼の達成は、さまざまな予測である。1937（昭和12）年、日中戦争の勃発のさい、これが世界戦争（第2次大戦）につながると警告した。また、中国革命は結局、中国共産党の勝利に終わると早くも判断しつつ、彼は評論を展開した。

「…〔7月〕8日未明北平郊外蘆溝橋に於ける日支両軍の衝突は今や日支両国間の全面的な衝突を惹起せんとする形勢にある。恐らくは今日両国民の多くはこの事件の持ち來たすであろう重大なる結果につき今まで深刻に考えていないであろうが、必ずやそれは世界史的意義を持つ事件としてやがて我々の眼前に展開され来るであろう」と書いた²。勃発5日後のことである。「北支問題の解決方法

は從来はただ北支の局地的解決方法であった…しかし最早問題はかかる方法を以つてしては解決しえない段階に到達したのである。…北支問題は今や全支問題なのである。…全支問題の意味が単に全支の統一政権たる国民政府の問題であるという意味でなく全支那民族を相手にしているという事実である。…国民政府の持つ武力は恐らく大して問題でないであろう。しかしながら支那の民族戦線の全面的抗日戦との衝突は遙かに重大な意義を持っている。…最も問題となり得るのは英米の動向であろう。イギリスは日支の全面的衝突を来たす場合に於いては自己の經濟的利益を度外視して支那の側に立つというが如きことは無いであろうと思われる。問題は寧ろ多分に感情的であるアメリカの側に存在する」。ハル・ノートのような、5年後の日米問題もまた、予測したのである³。

2) 中国情報は多くても

日中間は、同文同種で一衣帶水の距離、お互によく分かり合っていると思っていながら、実際は心も通い合っていない。日本人は西欧化の優等生として、中国を軽く見ている。このことに自分自身気づいていない。「情報が少ないのでない。多いのである。しかし、日本人は方法論を持っていないから捉える事が出来ない」。日本側に対してさらに言えば「言葉の理解の困難に阻まれ…一般は中国研究を放棄し、之を少数の軍人と外交官と一部商人と支那研究家の手に委ねたのである。…日本人は極めて心外とするであろうが、支那人は決して日本に対しても物質的にも文化的にも敬意を表していない」。「東洋的中国論が横行しており、…東洋的中国論の目指すところは一種の民族理論であり、…白色人種に対する日支同色人種の提携の主張となって現れ、アジア・モンロー主義、あるいは大アジア主義の主張を生むのである。この場合、日本が常に“アジアの盟主”たることはいうまでもない」⁴。

日中戦争勃発後3ヶ月の発言。日本人の中国認識の不十分さを批判している。

ここでいう「日本人が持っていない方法論」とは、屈折した表現であるが、まさしくマルクス主義的な社会科学認識を指す。

北京郊外、蘆溝橋の一弾で日中戦争が始まったが、戦争不拡大の政府方針にかかわらず戦線はどんどん拡大した。1937（昭和12）年8月14日には第2次上海事

変に飛び火し、南京、徐州、廣東、武漢3鎮と広がる。国民党は重慶に後退して抗戦を続けた。蒋介石は、民族戦争と宣言し、最後の勝利を得るとした。

メディアは、戦勝を喜んだ。しかし、尾崎は軍部の報道管制をかいくぐって、戦争の現実を読者に訴えた。

3) 江南の平野を蜂の巣にするのか

都大路には〔上海事変〕戦勝の提灯行列の火がえんえんとして秋の夜空に映えている。しかしながら我々は何かしらただこの勝利に酔いきれないものを感じる。それはまず上海の戦線の苦難なる戦闘に没頭しつつある同胞の上を思うからである。上海に戦端が開かれてから10月24日までにすでに5千余の人命が失われたと公式に報ぜられている⁵と書き、続いて「自分の村には新しい幾本かの墓標が立ち、幾人かの若き友人たちは大陸から永久に帰って来ない」⁶と訴える。さらに、「眼を戦線の彼方に放てば、そこはかっての豪華な建設を誇りつつあった首都〔南京〕をはじめ、蜂の巣のごとく穿たれた、江南の平野が黙々と展開されている。我々の如く幾度か、この地方に遊びその風光に接した者にとっては感慨なきを得ない」⁷と嘆き、「日本は元来支那と支那を粉碎して支那を揚子江と黄河との流れているだけの自然に帰してしまう氣でこの戦いを始めたのではなかつたはずである」⁸と怒り抑えて記す。さらに、南京陥落当時、上海で会った中国に詳しい、憂國の日本人老先輩が「軍事力をあくまで發揮して敵の中核を殲滅する以外にない」⁹と言ったと書く。旧い日本の中国観に対する暗澹たる心境を、このような表現で報告している¹⁰。

II 軍部批判とアジアとの共存

1) 日本を破局に驅る軍部

こうした評論の底流にある彼の反戦・反軍・反政府、すなわち彼独自の“レジスタンス”ともいえる心境は、のちゾルゲ事件に連坐し獄中から出した『第1上申書』でも伺える。日本の指導層には太平洋戦争の行方、即ち敗戦が見通せた1943（昭和18）年6月ごろの記述である。6月8日付提出。

「近年の日本政治に対する私の中心の憤懣は、日本の政治指導者が世界のゆきつつある情勢にはっきりした認識を持たず、日本を駆って徒らに危険なる冒險政策に邁進せしめつたるということでありました。満州事変以来は軍部がひたすら政治的指導権を握らんとしつつあるものと考え、政治家は無能にしてこの状勢を制御する見識と能力を欠くものと難じたのであります。軍部の目指すところは、対外政策においては、独逸との緊密なる提携であり、その当然の帰結として、ソ連、または英米との戦争を惹起せんとするものであると信じ、日本を駆って破局的世界戦争に投ずるものであると痛憤したのであります」¹¹。

また、すでにその前年、開戦後の続く勝利に沸くなか、取調べの検事に対し、「…破壊と貴重な人命の犠牲の後にくるべきものが、…新たに対立を惹起するというこの大戦争の結果が、いかに愚劣極まるものか…もういい加減反省してよいころではないか」と怒りをぶつけている¹²。

2) 日本の生存はアジアと結びつく

彼は、読者に訴え続けた。どう書いたか。

例えば、「この日支事変は何より深いところで日本の生存と直接に結びついでおり、しかも全力を傾け尽くして、しかも長い忍耐の期間を要する困難な問題であると考えるのである。恐らくは、日本に本質的な根本的な改造をもたらすことを伴わないでは、この問題は解決し得るものではないであろう。…それにしても戦争の遂行に必然的に伴われる破壊と、次第に抜け難きものとなりつつある民族的乖離とは、眞の将来の日支提携をますます困難ならしめつつあるものとして、我々をして深き嘆息を感じせしめずには置かない」。早くも日支提携と日本の改造の絡みの深いことを強調した¹³。

そして4年後もまた繰り返し、その時の話題「大東亜共栄圏」を論じるとき、「東亜共栄圏」確立とは、これまでの対中国民族問題に加え、南方民族問題まで拡大して問題を解決することであるとしたうえで、「この事は、日本自身の自己革新とも直接に関連をもつことなのである。あらゆる困難を賭しても新しき東洋を建設せんとする日本は、自己革新と結びつけることなくしては、東亜諸民族の正しき結合による新秩序創建の偉業を直ちに達成しえないことを、銘記すべきで

あると信ずるのである」とし、日本自身の変革に言及している。これは、日米開戦の年、即ち尾崎が逮捕される7ヶ月前の1941年（昭和16）2月6日に執筆し、『改造』3月号に発表した「東亜共栄圏の基底に横たわる重要問題」である¹⁴。

この間、彼は幾度も繰り返し日本自身の改造を訴え続ける。尾崎は、筆に細心の注意を振るっていたが、東京地裁検事局は3月、この「…重要問題」を問題思想としてマークした¹⁵。彼には、危険をおかしても迫り来る戦争の危険を予測し、書かずにはおれないことだった。

III 近衛内閣と尾崎

1) 衆望担つた近衛内閣だったが

若い日の社会主義論文、パリ講和会議での白人主義批判、五摂家筆頭の家柄、だから軍を押さえることができるのではないか、と各層からの衆望を背負って組閣したのが、近衛文麿だった。1937（昭和12）年6月4日のことだ。しかし、すでに見たように7月7日、日中戦争が始まり、戦線は拡大するばかりだった。年譜で、日中戦争の推移と第1次近衛内閣の動きを見ておこう。

1937（昭和12）年

- 6月4日 第1次近衛文麿内閣成立
- 7月7日 北京郊外蘆溝橋事件。日中戦争始まる
- 8月9日 第2次上海事変。11月まで
- 11月5日 杭州上陸
- 12月17日 南京入城

1938（昭和13）年

- 1月16日 「国民党政府を相手にとせず」と声明（第1次近衛声明）
- 2月 徐州作戦
- 5月19日 徐州入城
- (7月11日 対ソ・張鼓峰事件。8月まで)
- 8月23日 武漢三鎮（漢口、武昌、漢陽）作戦。10月27日 占領
- 10月21日 広東占領

11月 3日 「東亜新秩序」声明（第2次近衛声明）
12月22日 「善隣友好・共同防衛・経済提携」声明（第3次近衛声明）
1939（昭和14）年
1月 4日 第1次近衛内閣総辞職

2) 新志向の「東亜新秩序」

すでに触れたように、北京郊外蘆溝橋で始まった日中戦争は1937（昭和12）年8月、第2次上海事変に飛び火し、南京、徐州、広東、武漢3鎮と広がるが、中国は重慶に後退して抗戦を続けた。蒋介石は、民族戦争と宣言し、最後の勝利を得るとした。1938年（昭和13）11月3日、近衛文麿首相は、「東亜新秩序」（第二次声明）を出し、日本と中国が一体となり協力しあって平和を築き、アジアに貢献しよう、と呼びかけた。この年の1月16日、「国民政府を相手にせず」（第一次声明）を出して、交渉の道を閉ざした日本にとって、大陸政策の180度の方向転換であった。新志向だ、と尾崎は歓迎した。尾崎ばかりではない。ジャーナリズムは歓迎した。さらに、12月22日、第三次声明を出し「善隣友好・共同防共・経済提携」と内容を明確にした。しかし、近衛内閣は翌年1月、総辞職した。

この間、尾崎は第1次近衛内閣の書記官長・風見章の招きで朝日新聞社を辞め、1938（昭和13）年7月8日、内閣嘱託となった。総理官邸内に机を置いて仕事を始めた。近衛内閣の対中国関係の改善が、迎えられた尾崎に最初に与えられた任務だったことは間違いない。「東亜新秩序」の構想に深くかかわっていたと見てよい。最初の草案を書いたのも間違いない。発表されたものは、修正を加えられて、帝国日本を露骨に示した宣言となつたが。

日中提携をめざす尾崎にとって、「国として抗戦中国と話し合う。しかも手を取り合って平和を築き、アジアに貢献しよう」という180度の方向転換した近衛声明は思いがけない、また喜ばしい展開だった。

この近衛の新志向に刺激を受けた論壇には、さまざまな「東亜新秩序」具体化構想が競つて出た。「東亜協同体」構想も、その一つであり、「昭和研究会」を中心とする一群の人々、蟻山政道ら、革新左派知識人らの構想だった。昭和研究会とは、近衛の国策を支える私的研究機関で、尾崎も昭和研究会の重要メンバーだっ

た。彼は、彼自身の立場を1938年（昭和13）12月11日までにまとめ上げ、時評「東亜協同体の理念とその成立の客観的基礎」として『中央公論』翌年1月号に発表した。しかし、相前後して1939（昭和14）年1月4日、近衛内閣は総辞職し、尾崎もまた内閣嘱託を辞め、官邸を去った。

IV 中国ナショナリズムへの視角

1) 中国民衆の武力排除は不可能

尾崎は、この「…客観的基礎」の論文で、近衛声明の「新秩序」の理念の達成を探りつつ、尾崎の「目覚めつつある中国」像を抱いて、論壇の「東亜協同体」の論拠の甘さに批判を加えつつ、かつ、そのめざす理想には同意して持論を展開した。

まず、この近衛の交渉への呼びかけ、すなわち「新秩序」の宣言の理念とは何であったか、と問う。

「支那の征服でなくて協力である」

「支那民族も新東亜の大業を分担する」

「新平和体制を確立する」

「東亜諸国を連ねて真に道義的基礎に立つ自主連帯の新組織を建設する」

以上であると、尾崎は論断した¹⁶。宣言のうち「共同防共」を無視していることに注目したい。まず、日本の戦勝で生まれた日支間の新事態を固定化することに反対する。戦勝側の日本が自分本位の政策をとっていいと言わんばかりの論議を拒否するのである。東亜諸国を連ねて、平和を確立するという理想の実現の途上ではないか、と説く。「東亜協同体」の理念は満州国成立の際の王道主義も「八紘一宇」の精神も根本において「協同体」の観念と通じるものがあるが、単なる東亜経済論では全くないとする。そして、日中戦争三年の経験の中から生まれた新しい歴史的産物である、とする¹⁷。また「事変以来の民族問題とのはげしい体当たりの教訓から生まれ來ったもの」と書き、「事変の初めにおいてはもとより、南京陥落、おそらくは徐州戦前においては、いまだこの言葉は現実の問題となりえなかつたことであろう」と書いた¹⁸。言葉を変えて言えば、日本軍の大陸攻略が成功すればするほど、中国民衆のナショナリズムを目覚めさせる。

それを、大陸・本国を含めて日本人は新しく経験したはずだ、というのである。

2) 湧き上がる大地からの抵抗

尾崎の、この「東亜協同体の理念とその成立の客観的基礎」論文の中心的主張は、抗戦中国のナショナリズムをはっきり認識したことである。「低い経済力と、不完全な政治体制と、劣弱な軍隊とを持つ中国が、ともかくも今日まで頑張り続けている謎は、実にこの民族問題〔ナショナリズム〕にあるのである。これは単に国家的規模についてのみではない。ゲリラ戦の戦士はもちろん、一切の政治的な勢力と不共同な態度を以て、ただ大地のみを相手にしているかの如き農夫や、街頭のルンペソ少年に至るまで、それぞれの形を持って貫いている問題なのである」¹⁹。中国の大地のすみずみまで、侵略者に対する抵抗の念が浸透している、とする。

さらに、筆を継ぎ、欧米の支持を得た中国上層部もまた、直接の利害を顧みないという。「講和問題の如きにおいても、今日に於いては支那に偉大なる圧力を有する英米といえども支那に講和の強いことはなしえぬであろう」。即ち、英米に頼る上層階級、政治家に至るまで、日本軍の大陸侵攻に民族意識を呼び覚まされ、英米の経済的、あるいは軍事援助で抗戦しつつも、英米の対日調停が仮にあっても、すぐそれに乗るような態度はとらない、とまで観察している。中国民族の自決の観念が下から上まで広がっている、と考察している。

第3次近衛声明には、日中の「経済提携」が直接的に謳われているが、これを進める為に、無視できない問題だと尾崎はいう。「支那における長期経営の問題に於いては、その復興を第1着手としなければならないのであるが、その時においても、支那の民族運動の動向を無視して経営が強行されるということは、少しもその効果において賢明なる策とは云いがたいのである」²⁰。「支那民族の不精無精でなしの積極的参加がなくては成立ち得ないのである。それは決定的な事実なのである」²¹。戦火で荒れた日本軍の占領地の経済復興という現実の重要な課題が迫っており、日本資本と中国の民族資本が協力できるか、が鍵だ。

外交においても矛盾がある。「日本自身、内部には欧米列強と少なくとも客観的には選ぶことなき主張と要求とを残存せしめているという、すこぶる困難な立場なのである」²²。即ち、欧米資本主義と変わらない日本資本主義の中国への要

求があることを、尾崎は改めて読者の前に提出する。「ここには確かに、東亜における『新秩序』と言う観点からして、清算さるべき夾雜物を多く包含していると感じられるのである…だから、英米その他列国の猜疑する日本の独占的な排他主義であってはならないのである」²³

しかし、幸いなことに「東亜協同体論者のほとんど全部が東亜をもって、ひとつの封鎖的な単位と考えておらず、単に世界的秩序一般に対して先行する地域的、人種的、文化的、経済的、共同防衛的な結合であるとみていることは正しいであろう」²⁴。すなわち、「開かれた協同体」で無ければならないことを強調するのである。

3) 国民の再編成が必要

実現の困難性について、三つをあげて戒める。これは明らかなことだが、まず中国側の聞く耳を持たない態度と警戒である。近衛第2次声明（1938年11月3日）、すなわち東亜新秩序声明に対し、中国側の反応は、「東亜の新秩序を建設すると云っているが、世人を欺瞞するに過ぎない。平等の条件に基づいて日本と合作することは従来より反対していなかったが、東京政府により提議された政治合作は全く支那の自由独立国家としての神聖権利を犠牲にせんとするもので支那国民はあくまで反対せねばならぬ」というものであった²⁵。交渉相手からの全くの拒否であった。いかに説得するか。

二つ目に、「実際政策に適用されんとする場合において、強力なる摩擦を国内の資本主義経営との間に生じるにいたるであろう」と日本の現状維持勢力の壁を指摘する。軍部による日本占領地を日本資本主義の展開地域にしたい、日本の財閥の要求を言っている²⁶。

最後に、これが「日本がまず変われ」ということの尾崎の大局的観察に基づく解決策なのだが、「大陸における復興建設の大業を遂行せんがためには、日本の現在發揮しうる全能力は信頼するに足らないと言わざるを得ないのである。日本の政治経済をかかる目的に照応せしめて編成しなおすということは絶対必要とわれわれには思われるのである…日本国民の再編成を行う必要があるであろう。必要であると云うより、むしろ不可欠の要件である。支那におけるこの東亜協同体理論を真に自己のものとして協力せんとしつつある人々は、日本のいわゆる国民

再編成問題の成り行きに特に注意を払っているのである。彼らは、日本自身従来の主張を変え、根本的指導方針を変更してくるのでなければ、従うことができないとすることは、極めて理由があることと思われる」²⁷

尾崎は、このように述べて、彼の評論を読むであろう中国の人々にも呼びかけ、期待をかけた。

そして結ぶ。「東亜協同体論の発生が、これまでの論議と違っているのは、支那における民族問題の意義に気付き、翻って自国の再組織に思い至ったその真剣さにあるのである。この点は、東亜制覇の雄図を基として描かれた他のもろもろの東亜民族の大團結的計画案とは異なった謙虚さを持つものであろう」²⁸。理念を高く掲げ、中国のための、東亜のための日本であることを日本人に訴えている。尾崎自身の「東亜協同体」は、彼の理想を秘めたものであった。

そして、論壇全体を見据えた言い方として、「民族問題〔ナショナリズム〕の対比において東亜協同体論は、いかに惨めにも小さいか、これをはっきり認識すべきである」という²⁹。東亜経綸論以下、日本人の視野が隣国中国の大きなうねりを感じせず、また、欧米を批判しつつ、欧米と同じ主張を中國の人たちに課する自己矛盾に気づかぬことを批判した。大きなうねりとは、中国人のナショナリズムの胎動に他ならない。

この論考から二ヶ月後、『改造』3月号で発表した「東亜政局に於ける一時的停滞と新なる発展の予想」でも、尾崎は、このナショナリズムに触れ「要は支那の持つ民族問題の性質を具体的に掘る努力に入るべきことである。この民族問題を解決する能力を欠くならば東亜協同体論は結局一つの理念として終り、発展性を持つにいたらないであろう」と訴えている³⁰。要するに、尾崎の戦中期の中国問題論考では、民族問題〔ナショナリズム〕が最大の論点なのだ。

尾崎の東亜協同体論は遠く将来に向けて目を放つ。そして理想の構想として日本人に切言する。日本軍の勝利に酔って、近衛第2次声明の、抗戦中国と未来のために協業しようという意義を感じできない人々に、次のように言う。「戦いの相手方たる支那のみが変わったと考へ、自分たちの足下は絶対に動くことが無いと考えている人々にとっては、この協同体の理念は絶対に理解できないところで

ある。また或る人々は、この協同体の理念が戦勝国たる日本が東亞大陸における
霸業を確立するための手段であるとし、又は霸業を緩和して示すための外衣にす
ぎないとするのである」³¹ と。

V 東亞共栄圏觀とアジア新秩序

1) 心事高潔ならざる輩が…

尾崎はさらに、厳しく日本人へ迫る。

「われわれは静かに聖戦の意味について三思する必要がある。今日、一部に於いて、もしも日本が、その大陸に対する要求を具体的に明瞭に形の上で現すのでなければ、尊い血を流した勇士たちは瞑することが出来ない。また艱難辛苦しつつある出征兵士たちが収まらないであろうとの説をなすものがある。絶対に正しからざる説である。おそらくは心事高潔ならざる輩が自己の心事をもって推しはかったものであるに違いない。一身を抛って國家の犠牲になった人々は、絶対何らかの代償を要求して尊い血を流したのではないと我々は確信するのである。東亞に終局的な平和をもたらす、東亞における新秩序の人柱になることは、この人々の望むところであるにちがいない」³²。父祖たちが命を的打ち立てた権利を譲るわけにはいかない、と日ごろ言う在郷軍人会や愛國婦人会、国防婦人会など諸団体、軍部と、それに迎合する新聞に正面から挑戦したのである。

尾崎は、この1938（昭和13）年12月に書いた時評「…客観的基礎」以降、中国問題を、日本の国内問題あるいは国際問題とからめ、日中提携の可能性を探った。いづれも日本自身の改造が訴えられている。まとめておくと、主な時評は、以下の4編である。

「新体制と東亞問題」『東亞同盟』1940（昭和15）年10月号=V378ページ

「南方問題と支那問題」『東亞同盟』1940年12月号=III195ページ

「東亞共栄圏の基底に横たわる重要問題」『改造』1941（昭和16）年3月号
=III202ページ

「転機を孕む国際情勢と東亞」『中央公論』1941年7月号=III230ページ

ここで、先の戦争で、日本の東南アジア支配の正当化理論だった、「大東亜共栄圏」の発想を、どう尾崎は捉えているのだろうか、尾崎の言葉で見ておこう。この「大東亜共栄圏」の言葉を産み出したのは、第2次近衛内閣（1940年7月22日）の外務大臣、松岡洋右だったといわれる。ナチス・ドイツのヨーロッパ席巻で、アジアのフランス、オランダ勢力が弱体化、これ好機到来と考えた軍と政府は、東南アジア諸国の共存共栄と、この地域からの西欧勢力排除を名目として積極行動に出た。その内実については、われわれがよく知る通りである。

2) アジアを知らない東亜共栄圏論

「第2次近衛内閣は、その外交政策の中心理念として“東亜共栄圏”なる言葉をもつてした。第1次近衛内閣の見事なる標語“東亜新秩序”は、如何なる理由をもって共栄圏に変えられたのであろうか、その理由は必ずしも明瞭ではない。まず東亜新秩序の創建は偉大なる歴史的事業であって率直なところ未だ殆どその端緒すら出来上がっていないと思われる。東亜新秩序の言葉が揚棄せられる理由はないと思われる所以である。一般には東亜共栄圏は、国策としてはっきり取り入れられた南方国策を包摂する新段階の政策を意味するものであると解されている。我々は一つ一つの政治的時期段階に応じた表現の必要を排するものではない。且また政策決定の起案に携わる人々が、その趣味による表現を用いることに敢えて反対するものではないが、苦難に充ちた民族的自覚から生まれ、新たなる理想に高められた標語が、何等その目的を達成されずして押しやられることに不満を感ずるものである。かつ「共栄」の観念は、いまだ東亜の歴史的現実とかけ離れ過ぎている。それはいささかの安易さの匂ひすら包んでいるようにも見受けられる。事情が変わったのは、ただ歐州政局の異常なる発展〔1939年9月1日の第2次大戦勃発〕の事実のみである。日本の主体的力量には、遙滅こそあれ増強はなかつたことは物理的に明らかである。従つて南方政策を重要な支点として旋用せんとする新政策は、最も苦難に充ちた且深刻なものでなければならない筈である。最も真剣味をもつたものでなければなるまい。我々の理解する限りでは、東亜新秩序の内部の充実を前提にして、これらの発展的な形態としてのみ南方問題を考えて行こうとする態度が絶対に必要であると考えるのである。東亜新秩序の内部的

発展を離れて宙に考えられた南方政策は、頗る危険なものを含んでいると言ひ得る。これは言葉の問題ではなく、心がまえの問題であり行動の方向である³³。

尾崎は、売り出し中の“知米外相”松岡の世界政策「共栄圏」が、アジアの現実を見ず、日本の理想も知らず、世界の流れに漂つたものであると断じ、言葉の趣味の問題だ、と切り捨てている。満鉄（南満州鉄道）東京支社調査部嘱託の尾崎は、同調査部拡大に力を振るった松岡を容赦なく批判した。尾崎はいかに“東亜新秩序”の構想に命がけであったか、がわかる。

3) 民族の自己解放こそ

2ヶ月後、筆は冷静に戻って「第2次近衛内閣は“東亜共栄圏”なる言葉を掲げたのである。この言葉の意味は特別に公式な解釈は与えられていないが、第1次近衛内閣の標語たる“東亜新秩序”なる言葉に対して具体的には南方問題を取り入れたところに、範囲の広さと経済的な南方とのつながりを含むものと理解されているのである」³⁴ 「南方問題の含む最大の意義はこれらの領域の持つ民族的問題に存する。これらの抑圧下に立つ諸民族の自己解放運動こそは東亜共栄圏確立の不可欠な要素をなすものである。今日南方に於ける諸問題は、この東亜諸民族の自己解放の問題と、英米が新秩序諸国との対立のために戦略的地位を確保せんとするあがきの問題とが絡み合って現れて来ているのである。印度、ビルマ〔ミャンマー〕における民族的要挙の台頭は前者の現れであるが、泰国〔タイ〕における失地回復の問題〔タイ・仏領インドシナ間の国境紛争〕には泰をその支配下に置かんとする英米の策動が混入していることを伺いうるのである。これに対する仏印の側では民族的な問題よりもむしろ仏印当局の防衛的意図が表面に現れてきているのである。勿論仏印にも深刻なる民族問題が存在していることは1930年当時の革命情勢〔ベトナム国民党・インドシナ共産党の主導による反帝・独立運動〕を想起すれば明らかである。蘭印についても1926, 7年当時からの民族運動〔インドネシア共産党・インドネシア協会の主導によるジャワやスマトラの反帝・独立運動〕の流れが存在していることを看過してはならない。これら西南アジアの民族運動の昂揚が支那における民族運動の台頭と密接な関連を持つものであることは多くの人々の指摘するところである。東亜民族の解放と自立、

それを通じての東亜諸民族の協同こそは東亜新秩序創建の不可欠なる要素であろうと確信するのである。その前段における民族の自己解放の作用こそ旧秩序勢力にとどめを刺すものであろう」³⁵。

「単なる資源との結びつきに於いて理解すべきでもなく又軍事的戦略的地位に於いて理解すべきものでもない」³⁶。

これらから、尾崎の「東亜共栄圏」観は、「アジア新秩序」論の枠内に位置するものであることが見て取れる。ここにおいても、尾崎は「東亜の2大国民たる日支両民族の完全なる理解と提携の必要と必然性は…現実情勢から見るとときにはたかも千里の距離のある如く見られるのである。しかしながらそれ以外には眞実の行き方ではないことは確かである」とアジアで果たす日本と中国の役割を熱っぽく語っている³⁷。

さて、尾崎が心を込めた“東亜新秩序”論は、どう読者に受け止められたか。尾崎の反省を見ておきたい。

VI 「新秩序」構想は早すぎたーまとめにかえて

1941年（昭和16）7月7日から9日にかけて、『都新聞』に「支那事変と東亜結合の理念」を発表した。日米開戦の5ヶ月前に当たる。

「支那事変4年の経験は東亜民族をして、東亜の結合に対する極めて切実なる理想を燃やさせたと同時に、また東亜の四分五裂の現実をあまりにも明瞭に感ぜしめたのであった。しかしながらこの理想と現実の甚だしく惨めな乖離は理想に対する絶望を教えるよりはかえってますますこの理想に対する接近の熱意を抱かしめたのである」³⁸。反省しつつ、しかし粘り強く前途に希望を託している。

「支那事変は日本の識者に否応なしに支那というものの本体を分らせる作用をなした。自分たちの勝手に考えて支那というものが如何に事実と異なったものであったか、従ってこれに対処する方法もまた如何に多くの誤りに満ちていたか、これは経験によって知らされるより方法は無かったのである」とまず書く³⁹。そして2年前の“アジア新秩序”的近衛声明を回顧して、「日支関係の新しい結

びつきの理想を率直に述べたことにおいて驚くべき当時の一般的な認識の水準を越えたものであった」とする⁴⁰。「しかしながら事実としてはその当時にあって知識層の共鳴を多く得ながら、今日においてかえってかかる理想的な考え方があまり強く支持されていないという逆の現象は、果たして何に基づくものであろうか」と自省する⁴¹。

「元来近衛声明的な理想は日本人一般の大陸に対する考え方と遙かに隔たっていたのであって、従って一般がこれを理解しうるためには更に一層の事実による経験と教訓とを必要としたのである。当時まだ事変による経験は浅かった。日本は圧倒的な武力を働かせて南京、徐州、廣東、漢口と占領した後で、却って事変の長期化するということを知ったばかりであった。そのときに描かれた事変の見通しは未だ現実とは甚だ遠いものであった。従ってその条件下で考えられた事変処理方式は独断的でありまたその上に立つ理想は観念的たらざるを得なかつたのである。やがて歐州大戦が起こり〔1939年9月1日〕日本も支那もあらゆる辛酸をなめ来つた後で世界の将来の中にあって東亞を省みた—今日、我々は初めて新しい日支関係を考え、東亞結合の理想を燃やす時期に達したということができるるのである」⁴²。

このように冷めやらぬ情熱を燃やして現実をみると、日本の戦費負担が日本占領地に及び、経済建設で地元の民族経済との摩擦を生んでいる。抗戦する奥地の重慶ではなくて日本と協力している国民政府の治下で起こっていることに改めて注意を促がしている。1939年1月の「東亞協同体論の理念とその成立の客観的基礎」での指摘が、そのまま繰り返されている。

もう少し、尾崎の「東亞新秩序」構想の意義を探っておこう。1938（昭和13）年ごろから、政府にも論壇にも広まった「東亞新秩序」の範囲は、東亞と言っても日本、中国、満州の3ヶ国を指し、そして、アジアに長く浸透してきた欧米の権益を、ロック化によって阻もうとするものだった。当然、これは国際関係に緊張をもたらした。尾崎の真意は、彼が拘束されてのちの1942（昭和17）年2月14日語った対司法警察官への発言を借りれば「…日、ソ、支3民族国家の緊密友好なる提携に依る東亞諸民族解放を条件とするものであります。更に英、米、仏、蘭などか

ら解放された印度、ビルマ、タイ、蘭印、仏印、フィリピンなどの諸民族は各々一個の民族共同体として、日、ソ、支3民族共同体との政治的、経済的、文化的提携に入るのですが、これ等解放された諸民族共同体が直ちに共産主義国家を形成するということは必ずしも条件でなく、過渡的には其の各民族の独立と東亜的互助連閥に最も都合よき政治形態を自ら選択して差し支えないのです。なおこの“東亜新秩序社会”に於いては、諸民族のほかに蒙古民族共同体、回教民族共同体、朝鮮民族共同体、満州民族共同体などが、当然考えられなければならない問題がありますが、私はその中、朝鮮民族については、朝鮮を民族国家として独立させるか、日本民族共同体の一部として存せしむるかは、朝鮮民族の意図其の經濟的自立性その他其の時期に於ける東亜全域の種々なる観点から決定されるべき…」⁴³と日本中心としたアジア支配の考えは全くない。ブロック化を拒む尾崎の開かれた精神を読むと、まず、日本から出発した変革は、中国と手を結んで、いずれはアジア全域に広がり、アフリカや南米にも達するという展望を示している。時代に追い込まれた尾崎ではなく、気宇の大きな尾崎の構想を感じる。

こうした新思考は、現実主義の、列強勢力の間に漂うままの日本外交に、理念を与えたのは間違いないことである。弱く恵まれないものの代名詞であるアジアに日本人は奉仕を、献身を、というアジア主義が、尾崎の筆で大きく謳いあげられている。

最後に、近衛との間を記そう。第1次近衛内閣の嘱託となり、日中間の融和の“東亜新秩序”に参画した尾崎の、近衛文麿とは、どのような関係に終始したか。日本の戦争の破局に、政治上層部は、救う力はないと判断していた、獄中の尾崎は、日本軍快進撃中の一九四二（昭和一七）年二月の時点で、日本にとって持久戦段階になれば經濟の弱さと対中戦争の消耗が致命的であると供述、さらに日本社会を破局から救う力は、日本の支配階級に残されていない、と断定している。身をもって苦難に当たった大衆自体が英米帝国主義と戦いつつ、自分の手で民族国家再建を行い、政治経験の浅い日本のプロレタリアートがソ連と提携し援助を受けて、日本の社会経済の根本的立て直しを行う、とまず語り、共産党がヘゲモニー

を握った中国と、三者が提携、これを中核としてアジアの及ぼし、さらに世界新秩序の一環をなす、と話している⁴⁴。日本の民衆に対する期待が高い。それほど、近衛に落胆していたといつていいであろう。

近衛文麿が1944（昭和19）年2月、天皇に上奏した文書には「國体護持ノ建前ヨリ最モ憂フルベキハ敗戦ヨリモ敗戦ニ伴フテ起ルコトアルベキ共産革命に御座候」とある。近衛その人が、国民にとって頼りがたい存在であることが明らかになる。同時に、昭和初期以来、戦争の拡大と国内の革新を進めてきた少壮軍人を共産主義の同調者と見なしている判断も、この文書にある。しかし、尾崎の予測、日本の変革が近いとの実感は近衛と共に通っていたことがわかる⁴⁵。

1942（昭和17）年11月18日、近衛文麿はゾルゲ・尾崎事件の証人として、彼の入院先、東大病院で東京刑事地方裁判所予審判事中村光三⁴⁶の訊問を受けている。「尾崎とはいかなる関係か」と問われて、「3、4回会っただけで、いつも牛場秘書官や西園寺公一らと一緒にいた。第一次内閣の当時顔は知っていましたが、嘱託をしていたとは知りませんでした」。また「尾崎は外国に通報する目的で…諜報団に加入諜報活動をしていたが…」と問われて「すこしも存じませんで非常に恐縮している次第です」と答えた。冷淡な対応に終始している。事実は果たしてどうであったか。

注

- 1 尾崎は、獄中から出した第1の上申書で、上海時代を次のように振り返っている。「深く顧みれば、私がアグネス・スマドレー女史や、リヒヤルト・ゾルゲに会ったことは、私にとってまさに宿命的であったといい得られます。私のその後の狭い道を決定したのは結局これらの人たちとの邂逅であったからであります。これ等の人々はいずれも主義に忠実で信念に厚く、かつ仕事に有能がありました。もしもこれ等の人々が少しでも私心によって動き、あるいは我々を利用しようとするが如き態度があったならば、少なくとも私は反撥を分かつにいたただろうと思いますが、彼等ことにゾルゲは親切な友情に厚い同志として最後まで変ることなく、私は彼に全幅の信頼を傾けて協力することが出来たのでありました」また、1928（昭和3）年11月、上海の地を踏んだ感激を、次のように獄中書簡1944（昭和19）年3月23日付で書いている。「宮崎滔天が始めて揚子江を遊って何とも知れず感極まって泣いたと書いてあることは同感出来ます。私も最初に上海に入った時の感激は一生のうち最大のものの一つです」と書いていて

いる。滔天一家は、孫文援助に家産を傾け、中国革命の成功をひたすら助けた日本人だった。神戸から船に乗り、東支那海を横切って、中国大陆を南北に分断する海のような大河、長江を進み、黄浦江を遡上して尾崎の前にあったものは、ニューヨークを思わず摩天楼と、その下で荷役に当たるクーリーの姿であったに違いない。この対照の懸隔の差。彼の思いを満たすに十分な、広大な風土と、恵まれない民衆に尾崎の胸は震えた。

尾崎は東京生まれだが、父の赴任地、台湾で中学校までを過ごした。父は漢学者で、また新聞社の幹部で、地元教育に熱心だった。しかし、あるときカネをねだる人力車の車夫にスッテキを振りかざした。子供時代の彼は父に抗議した。台湾は旧日本帝国の植民地だった。植民地で暮らす人たちの貶められた地位に正義感を燃やして育った。

尾崎は、1936年（昭和11年）夏、朝日新聞社在職のまま、米国カリフォルニア州ヨセミテで開かれた民間の賢人会議、太平洋問題調査会に日本側の一員として出席した。これが彼にとって、中国を除く、唯一の世界体験だった。民間会議とはいえ、公式の場では、国益に基づく参加国の議論の応酬があり、中国代表は日本帝国を批判した。ここでも中国人知識人に燃え上がるナショナリズムを尾崎は実感した。しかし同時に尾崎は、日本人が公式の場では偏狭にまで自国の国益を主張する性格があると冷静な観察をした。

- 2 「北支問題の新段階」『改造』1937年7月12日執筆＝II 60ページ
- 3 前掲「北支問題の新段階」II 65ページ
- 4 「支那論の貧困と事変の認識」『セルパン』1937年10月号＝I 219ページ
- 5 『改造』上海戰勝記念・臨時増刊号「敗北支那の進路」1937年10月執筆＝II 80ページ
- 6 『改造』1938年5月号「長期抗戦の行方」4月10日執筆＝II 94ページ
- 7 前掲「敗北支那の進路」II 80ページ
- 8 前掲「長期抗戦の行方」II 94ページ
- 9 前掲「長期抗戦の行方」II 102ページ
- 10 尾崎の唯一の戦場体験は、どうであったか。中国戦線での実情は、報道管制で書こうにも書けないことだった。同じ歳の同志、川合貞吉によれば、特派員尾崎は1933（昭和7）年1月、第1次上海事変の最中、帰国の社命が出て、上海を離れる前日、川合を戦火のあととの日本人居住区と中国区の境界へ連れて行った。鉄道線路に沿って土嚢が築かれ、日本の陸戦隊員が土にまみれ青黒い顔をして立っていた。土嚢は砲弾でところどころ、穴があいていた。尾崎は「昨日ここで激戦があった。僕がここまで来ると、便衣隊3人がつかまり処刑されようとしていた。バンドで手が背中にしばられていた。真ん中の1人が、すっと動いた。弾はバンドに当たり手が自由になった。とたんにこの男は逃げた。追い打ちの弾に当たったらしく、ひょろひょろとしたが、境界線を越えて去っていった」。最後まであきらめない。中国軍の正面、19路軍には四千人の義勇軍が加わり救国の意気燃えて戦った。二千七百の上海陸戦隊はいくつの大隊が全滅の危機に瀕した。一日戦場の跡を歩き回って、尾崎は川合に言った。「ずいぶんと女学生や中學生の死体が多かつたね。彼らは少年の純情を祖国愛に燃え立たせて勇敢に戦った。それにくらべ中央軍はだめだった」「今のところ、日本軍は武器で勝っているだけだ。どんなに〔中国の少年・少女が〕勇敢でも列国から売りつけられた不発弾では戦争はできないからね」。（『ある革命家の回想』徳間文庫、1987年）また、『最新日支関係史』（1940年）では「支那軍の抵抗力、支那民衆の執拗なる反抗的態度すらが…日本人の或る者には〔提携すべき相手

- として】頼もしさを感じせしめている」と書いている。
- 11 『現代史資料2・ゾルゲ事件2』「尾崎秀実の手記」(みすず書房1962年刊) 10ページ。
 - 12 前掲『現代史資料2・ゾルゲ事件2』「1942(昭和17)年4月14日付の調書」。286ページ。
 - 13 前掲「長期抗戦の行方」 II 96ページ
 - 14 III224ページ
 - 15 「尾崎秀実年表」 V 404ページ
 - 16 『中央公論』1939年1月号「東亜協同体の理念とその成立の客観的基礎』 II 309ページ
 - 17 前掲「…客観的基礎」 II 310ページ
 - 18 前掲同 II 310ページ
 - 19 前掲同 II 312ページ
 - 20 前掲同 II 312ページ
 - 21 前掲同 II 313ページ
 - 22 前掲同 II 316ページ
 - 23 前掲同 II 316ページ
 - 24 前掲同 II 316ページ
 - 25 前掲同 II 314ページ
 - 26 前掲同 II 316ページ
 - 27 前掲同 II 317ページ
 - 28 前掲同 II 318ページ
 - 29 前掲同 II 314ページ
 - 30 前掲「東亜政局に於ける一時的停滞と新たなる発展の予想」 II 346ページ
 - 31 前掲「東亜協同体の理念とその成立の客観的基礎」 II 310ページ
 - 32 前掲「同」 II 313ページ
 - 33 「新体制と東亜問題」『東亜聯盟』1940年10月号 V 381ページ
 - 34 「南方問題と支那問題」『新亞細亞』1940年12月号 III 197ページ
 - 35 前掲同III201ページ
 - 36 前掲同III200ページ
 - 37 前掲同III200ページ
 - 38 『都新聞』1941年7月7日「支那事変と東亜結合の理念」 V 200ページ
 - 39 同ページ
 - 40 同ページ
 - 41 V 201ページ
 - 42 V 201ページ
 - 43 前掲『現代史資料2・ゾルゲ事件2』 129ページ。
 - 44 東京刑事地方裁判所検事局思想部編纂文書「尾崎秀実ノ革命ノ展望ニ關スル供述」1942(昭和17年3月)=社会運動資料センター(渡部富哉代表)が1997年復刻
 - 45 『史料日本史・下巻』(山川出版社、1978) 363ページ
 - 46 中村光三は、息子の稔弁護士・詩人に「自分の出会った日本人の中で最も偉いと思ったのは尾崎秀実、外国人ではリヒアルト・ゾルゲ」と述懐した。「私の昭和史15」『ユリイカ』2003年3月号8ページ(黄土社)

Hotsumi Ozaki's Political Commentaries during the Sino-Japanese War

TAKAGI Yasuyuki*

In the middle of the Sino-Japanese War (1937-1941) a Japanese writer made the audacious proposal of joining hands with the Chinese. Hotsumi Ozaki was his name. His stage was the leading magazines at the time like Chuoukoron (Central Tribune) and Kaizou (Renovation).

He repeatedly wrote that we must start to give way to the Chinese people from our side in order to realize joining hands with them.

The Japanese Imperial Army was marching in pursuit of the Kuomintang Army up to the Midland China along the Yangtze River at that time. He dared to challenge the flaring Japanese Chauvinism against China and was nonchalant of the severe censorship of the wartime Japanese authority. "Reform" was the popular word in the press and reformists existed everywhere both on the right wing and on the left. Ozaki's firm stance toward "Reform" and his celebrity might make the censor's eyes blind.

His acclaimed commentary on Chinese Nationalism appeared January 1939 in Chuoukoron. The title is "Examining the objective basis of Toa Kyoudoutai (Asian Community) Theory".

He explained how Chinese who constituted Chinese society at root had gotten an identity of themselves after long difficulties of famine, the rule of selfish landlord and the invasion of the Japanese Imperial Army, and had at last integrated themselves.

* ex-reporter of the Asahi

For the Japanese, it should be easy to choose to share peacefully with Europe and America the large market of China. But the Japanese do not. The reason is that Japan has fallen by destiny into living with China in the course of modern history. The three years' war experience from 1937 to 1940 with China has made clear that both peoples are combined by a value not calculated by economy alone.

The requirement to put the Ideal of the Asian community into practice is that the Japanese must change both their society and their economy. This surely demands hard sacrifices from the Japanese. Then the Chinese will understand the real meaning of the Theory and will give us their hearty support.

He continued.

Our common ideal of the Community theory is not for ourselves but for all the peoples of Asia, Africa, Europe, North and South America. We extend our wealth and welfare borne by the Sino-Japanese cooperation to the peoples all over the world and at first to peoples living in misery.

We stand far from any blockading Economic Zone.

When the Government promoted the Greater Asia Co-prosperity Sphere policy, Ozaki criticized hard the advocacy of the Foreign minister, Yosuke Matsuoka. He wrote that Matsuoka generated it without love of the people who lived in South-east Asia and with no knowledge of the misery under colonialism which they confronted day by day.

Really it was little more than propaganda intended to justify Japan's invasion of South-east Asia. We came to know this after the end of the Pacific War.

His commentaries are vivid documents of the agony of an intellectual at war time in Showa Japan. Being far from maddening Militarism and Tenno-ism, he inquired into what Japanese should do. He did so with passion of a patriot and with the brain of internationalism.